
ダガシスト

麻栗留音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダガシスト

【Nコード】

N3009Z

【作者名】

麻栗留音

【あらすじ】

駄菓子のような小咄を集めた短編集。

駄菓子なので後味悪く、胃もたれするものもあります。
でも癖になる。

樹海空間☆フレンズ

僕は学校とバイトの両立に疲れ果てて僕の部屋で友達たちが思い思いの落書きしていった折り畳み式テーブルに腕を投げ出し、角度があまりしっくりこない位置にしか固定されない惜しい座椅子に胡坐をかいて、遠方の女子高で開かれた美術の講習会でタイトルの意味が解らないと真面目な顔で講評され共に参加した同部活の友2名にクスクスの爆笑された「プルコギ」というマーヴェリング作品を口を軽く開けっ放しにしながらただ、見つめていた。なんで「プルコギ」なんて題名を付けたんだろう。その時はマーヴェリングの交ざり合う赤や緑や茶色やらの色が韓国的に見えて、これはプルコギってタイトルにしたら意味深で良いんじゃないかと内心ほくそ笑んで一緒に参加した他2名の友とは少し違った独特の感性でオンリーワンを主張したつもりだったのに、ひとり白い壁紙に画ビヨウで四隅を打たれたただ目の前に張り付けたそれを無音の中で眺めていると、プルコギっていうタイトルがクソだなんて思うしそれを自信満々で命名した自分がクソだなんて思う。僕の目の前の無機質に白い壁紙にただ張られてある、赤や緑や茶色がグッチャグチャに交ざり合った紙が、こうやってじっとして疲労感で体が動かなくて風呂に入りに行きたくても体を持ち上げるのが億劫でもうこのまま座って寝入りたい状態の頭で眺めていると、なんだかこのメチャクチャな色の渦の中に自分が吸い込まれて色と溶け合い、すごく自由な世界へ解放されるんじゃないかと変な妄想がわいてくる。プルコギ、なんでこれがプルコギなんだろう。なんでこれを作った時はあんなにプルコギだったんだろう。そんな数日前の記憶をグルグルと回していると、その回る記憶に合わせて友達たちが悪ふざけで落書きをしていた折り畳み式テーブルに描かれた変な絵たちが立ち上がり、僕の記憶と一緒に輪を描いて踊り始めるような予感を感じて焦った。なんか太った超絶にブサイクな女とか、露骨に悪意を感じる程精密に

描き込まれた女性器とか、手抜きのマッチョマンとか、そこにあった消しゴムの正確なデッサンとか、統一性の欠片も無い煮込み過ぎたわけのわからなくなった闇鍋のような落書きが僕のループする記憶の輪の上で何か変な踊りを踊りだすような錯覚があった。踊りに合わせて滑稽な祭囃子が鳴り始めて頭の悪い落書きたちがクネクネとしたふざけた踊りを踊り狂いながらなんか騒いでいる。僕はどつと疲れてきて、もう学校とバイトなんてどうでもいいやとか割り切り始めて落書きたちと一緒に踊り出す。するとなんだろう、今まで経験した事の無いような解放感で、僕を縛り付けているありとあらゆるものが鋼鉄の鎖のようにガキンツと金属音を響かせて砕け散り、僕の上下を包み込むスウェットがバリバリバリッと自然の力で粉々に破かれ去れ、すっぽんぽんになって僕はクソみたいな落書きたちと一緒に虹の輪の上を踊る。くねる無数の落書きたちと揺れる僕のポッコチンがこれ以上無いといったような自由な空間を創り、しがらみから解放されて歓喜の涙を流しまくる僕らを遠巻きに眺めていた背中に翼のある裸の子供たちがニコニコ笑いながら走り寄ってきて、自然と僕らの輪に加わり両手を高らかに上げ、足を無邪気にばたつかせて楽しそうにダンスを踊る。運命共同体となった僕達を邪魔するものは何もなく、ただひたすらに涙と笑顔とうねりを出しながらうごめく僕達の輪の中心に岩石や小石やスペースデブリが集まり始め、ひとつの新しい惑星が生まれてしまったのだ。とても若い、青春の鼓動に満ち溢れた、血気盛んで眠る事をせず走る若い星、これから幾多の生命の母になり悠久の永遠と膨大な巨大を生まれては死に生まれては無にを繰り返して逞しく成長してゆくこの若い星を、生まれたままの姿で感涙の涙と歓喜の声を上げる僕とクソみたいな落書きと天使が祝おう。君は僕らの友達だと、僕らは両手を開いて歓迎しよう。そしてこの青く輝く生命で溢れた奇跡の星を名付けよう。プルコギと。

パラレルは心配性がお好き

ジャングルジムのように組まれた鉄骨に緑色の蘿が絡み付き、その先に白い紙袋が無数にぶら下がる、そんな広大なぶどう畑だけが一面に広がる夕暮れの中で、僕はアパートまでの農道をひたすらに歩いている。僕の仕事は里山の整備で、毎日この誰一人として人の通らない、蛾とコウモリとぶどうを狙う野生動物しか立ち会わない農道を通勤している。今日はなんとなく気分で、昨日の夜に「明日は歩いて職場に行こ」と自分で決めたから、車で5分の道を30分かけてゆっくりのんびり歩いて来た。来る時はいつもと少し違う変化に新鮮な感じで、スローライフ最高などとルンルンしながら楽しく歩いて来たけれど、仕事が終わって今日に限ってずっと肉体労働十何をするにもうまくいかない日だった、すっかり疲れちゃったコンディションでの徒歩での帰路は、ぐったりして事務所を出る時に正直なんで車で来なかったんだろうと自分で決めた勢いの思いつきをどうしようもなく後悔した。どうしたって歩いて帰らないとアパートに帰れないし、あったかい風呂で背伸びしながら唸る事も、ベッドにバタンキューして背伸びしながら唸る事も、昨日買って冷蔵庫に入れてあるBIGぷちんプリンも頬張って身悶えして唸る事もできないのだし、僕はただ早く帰りたい、それだけのシンプルな理由だけでこの目の前をげんなりするほど律儀に平坦に伸びるバカみたいに素直なただの道を、お風呂で、ベッドで、プリン食って唸りたい気持ちだけで産業ロボットみたいに無機質に歩いている。朝のルンルンなんてバカじゃないの。何がルンルンだ死ぬ。自分で自分を罵倒しながら、それでも僕は戦地より帰還の路につく兵隊のように休まず歩を進める。だって、だって、そうしないと帰れないんだ。今日は歩いて来ちゃったんだから。すっかり心の荒んだ僕が歩を進める度に、限界を超えた靴の穴の開いたソールに食い込まれたいくつかの小石がギチッ、ギチッ、と擦れた音を出し、それと合わ

せてキュムッ、キュムッ、という薄く残ったソールとアスファルトが擦れる音だけが一定のリズムで鳴っていた。それが段々と、なんかムカついてくる。自分…、なんでこんなところ、歩いてんだろう。なんで昨日、明日は歩いてみようとか思い立っちゃったんだろう。ポンキッキのあの歌でも聴いたならまだしも、ただの勢いって、何勢いでなんでこんな辛い目に自分で自分を遭わせてるんだろう。バカじゃん。ただのバカじゃん。歩を進める度に、メモリーに忠実すぎて融通の全くない車のナビゲーションみたいにバカの一つ覚えで繰り返す、ギチッ、キュムッの音が無性に感に触って、わざとソールを強くアスファルトに擦ってみたり、転がっている小石を気分はプロサッカー選手でシュートッ！してみる。そして少し楽しくなる。自分小学生じゃん、なんて楽しくなる。でもしばらくすると疲労が勝って完全に飽きて、また無機質に歩き始める。嗚呼…、早く帰りたい…。一瞬で帰りたい…。ドラえもん…、アレ出して…。定番の妄想が吹き出してくる。そして、ムカついていた足音がやがてジャリッ、ジャリッ、という未舗装に変わった路面を踏む音に變化した頃、西日も暮れかかり夕闇に包まれた牧歌的な農道の遙か先に、何も無い場所にただ佇む人の影が目に入って、僕は少しだけ驚いて目を開いた。少しだけ、しかし目標を凝視する気満々で開かれた僕の視線の遙か先、まるでここはそのまま賽の河原に続く道かと思わんばかりにまっすぐ伸びる、本当に何も無いただの道、その先に、ぽつりと人が立っている。僕の上には日が落ちて暗くなった夕闇の空、左と右には無数の白い紙袋がぼんやりと宙に浮いたように見えている、ただ恐ろしく広いどう畑。僕の下には何の変哲もない砂利の路面があるだけ。後ろにはひたすらに歩いてきた道だけがあり、それは僕の前にも繋がっている。でも、僕の前方には、後ろにある歩いてきた道が確かに伸びているが、佇む理由のすぐに解らない場所に、人だとすぐに解る物体が明らかに立っている。案山子や郵便ポストやその類の立地物は、この毎日通る道には無いんだ。一切無い。それは言い切れる、だって毎日飽きるほど通っている道

だから。全て解り切っている道だから、前方の人影は居てはいけな
いものなんだ。だってこの道は人っ子ひとり通らない。車だって稀
なんだ、僕ぐらいなんだ、通るのは。だってそれは僕は人里離れた
里山の整備が仕事で、通勤のために通ってるだけだ。そういう理由
で初めて通る理由のできる道なんだよ、此処は。僕の前方に見える
あれは、丸い頭に体が付いて、信じたくないけれど、確実に、人。
僕は表情を変えず、歩くスピードも変えなかったが、内心
の同様はやっぱ隠せなかった。2年間、毎日、全く人と行き合わ
なかったこの道で、なんで今日に限って、しかもこんな暗くなった
時間帯に、前から歩いて来るならまだしも、ご丁寧に明らかに怪し
く立ちすくむ人影が出現してしまった偶然は、僕には非常に高いレ
ベルの、立派な不安だった。あの人はなんであそこに立っているん
だろうっ。あそこに立って何をしているんだろうっ。立って何かを
する理由が全く無いあそこで、なんで立っているんだろうっ。誰っ。
近くに自転車が無いし歩いて来たんだろうけど、じゃあ、何をしに
来たんだろうっ。農具とか持ってる様子が無いけれど、じゃあなん
であそこにいるんだろうっ。ぶどう園の人じゃないのかな。立ち
小便をしている様子でも無いけれど、そして、農家のおじちゃん
やおばちゃんじゃなく若い女の人のようだけどっ、じゃあ、なんで
こんな時間に若い女の人がある所にいるんだろうっ。この時間帯
に女の人がこの道のある所に立って、何をしなければいけないんだ
ろうっ。何かしなくちゃいけないのか、じゃあ、何を。何かした
いのかな、じゃあ、何を。誰かを待ってるのかな、うん、誰も呼
べないよ。携帯圏外だし、待っても誰も来ないよ、この道。あ、
車でも待ってるの、じゃあなんで車の来そうな方向じゃない方角に
顔が向いてるの。そっちは西の里山だよ。そんなところから車は
向かって来ないよ。なんでそういう不可解な事するの。しっく
りと安心できる理由を僕に表して立ってくれよ、バツカじゃねー
のっ、怖えーんだっつーの。僕は相変わらず表情も歩くスピード
も一切変えなかったけれど、歩がどんどん進み、ソールに詰まった

小石と砂利道とソールが摩擦する音がただ回数を重ね、そこにいる理由が全然解らず、その存在が不安でしょうがない前方の人影の様相が徐々に明らかになっていくにつれて、水溜まりのように小さい器の心は嵐の海の如く、静かにだが、制御不能になりそうなくらい乱れに乱れまくっていた。どうしたって逃れられない前方に、嫌でもゆっくり迫ってくる強烈な違和感を孕んだ景色への軽い絶望感。なんで自分は今、バカみたいに丸腰で歩いてなんかいるんだっ。何か武器が欲しいっ。車でもバイクでも自転車でも何でもいいから、とにかく徒歩より早く移動できる物が欲しいっ。もしもあの人影に追い掛け回される事になったら、その時に確実に逃げ切れるツール、もしくはそうなる前に倒せる武器っ。いずれかが欲しいっ、でも、無いっ。無情だった。今、僕は安心と希望を託せる切り札が無い。もしも何か予期せぬ事態になったら100%、生身で乗り切らなくてはいけないんだ。僕は表に出さずに、悲しくなるくらいに隠れて怯えていた。徒歩とはなぜこんなにも逃げ道が無いのだろう、徒歩とはなんて無力な移動方法なんだろう。なんで今日に限って、歩いて職場に行くぞヒヤッホイなんて意気勇んで来てしまったのかを、脳裏にキヤタピラーのように無限に後悔させている。どうやら髪の毛の長い若い女と解ってしまったその違和感の根源の、更に顔立ちまで解ってしまう距離に自分が歩き、近付いている現実の、この逃げたくても逃げられない状況を回避したくしょうがない。最高に近いバッドタイミングで突如として現れた違和感。その違和感は事件を予感させるノーサンキューな要素の髪の毛の長い若い女。髪の毛の長い若い女は殺人事件を起こす、僕の脳裏のキヤタピラーに、浅はかであり加えて間違っている推理小説の回想が加わって共に回る。回るキヤタピラーは段々と容積を増し、立体的に風船のように様相を変えてゆく。そしてそれは、そこに居る事がこの状況で明らかに異常という状況に入ってしまう、鼻筋の整った髪の毛の長い若い女の顔の異様にくっきり開かれた目が、ただのひとも面白い物など何も無い西の里山の方に向けられていて、もしかしたら何か視線を向けて立

ちすくむに値する面白い要素があるのではと、自らの目線で確認してもやはり変わった事など何も無い西の里山だった事で益々風船のように、急激に膨らんでゆく。なんであの人はあそこで立ってんのっ、なんでっ、どうしてっ、何してんのっ、誰っ、バカッ、ふざけんなっ、居んなよっ、嗚呼っ…、怖いよおっ!! 僕はもう、爆裂の寸前まで膨らんだ不安と不信感の風船に押しつぶされ圧死しそうだ。嗚呼っ、もう10歩もしないうちに僕はあの人の横を通り過ぎなくてはならない。周りには頼り縋れるものなど何一つ無いんだ。ぼんやりと淡く白く光る無数の紙袋が浮かぶ、ぶどう畑。一番星が悲しく綺麗に光る夕闇のスカイ。ただ歩いて来た道、そして前に伸びる道。ウルトラに田舎の、パーフェクトな農道。そのどうしようもなく、どうもできない空間に泣き出しそうにただ歩く僕と、歩いて行くヒヤッホイしてしまった今日に限って現れやがった、頼んでない非日常。嗚呼っ、あと5歩で僕は不安の種を通り過ぎる。この距離で、髪の長い鼻筋の整った若い女が、最悪にも赤い服を着ている事が暗がり解ってしまった。口裂け女の可能性が浮上し、気が狂いそうになってきた。口裂け女だったらポマードって言わないとっ、ポマードッ、ポマードッ、ポマードッ。口裂け女じゃなかった場合に備えて小声で呟く。西の里山を見つめている、もしかしたら口裂け女かもしれないその女は、僕が遂に通り返さようとする直前に、黒い瞳が丸く際立つ、開かれた目線を事に僕に向けた。それに僕はうかつにもうつかり目をギョッとさせてしまった。少し体もビクンツとなった。ビクンツてなったのが気付かれたかもしれない。もうっ、嫌だっ、走りたいっ、この場から全力疾走して逃げたいっ。でも歩いてきた道は戻りたくないっ。だってアパートが遠くなる。アパートには疲れた体を癒す悦楽の時間が待っているんだ。これで逃げて引き返して結局この人がただの人で何も無かったら、また引き返した道に戻ってくるのは正直、メガトン級のうんざりだ。でも、もしかしたら引き返せば良かったって後悔する事態になるかもしれない。今僕が横を通り過ぎようとしているこの女は、この時間この

場所に居る理由が怪しさしか連想させない、しかも髪の毛の長い殺人時間を推理小説で良く起こす女なんだ。加えて赤い服を着ている口裂け女の可能性も秘めた女だ、このまま横を通り過ぎるのは良く考えたら物凄くリスクを孕んでるんじゃないかつ。心臓の鼓動が女に聞こえそうなくらい激しく高鳴り、すでに脂汗は額と背中をぐっしょりと濡らし、息は止まりそうなくらい小刻みになり、歩を進める脚はガクガクと震え、僕は酸素が脳に行っていないのか気が遠くなり、僕を見つめた違和感根源赤服長髪鼻筋、その集合体の姿のようで姿でなく僅かな光の反射光を網膜が映しているに過ぎないが質量を伴いそこに存在する、要するに女だ、女の横を通り過ぎるのが、怖い。怖い、それだけだ。真実はシンプルだ。嗚呼、もう僕は横を通り過ぎる。僕は結局、紆余曲折の思考の道を経て、この女の横を通り過ぎる。何も無いでいて。神様、どうか御守り下さい。お父さん、お母さん、ご先祖様…、何も…、何も…、何もありませんように…。

「あの、すみません。」

コタンクルの森

特に主な理由も無く数え始めてから、1682度目の冬が訪れた。鋭利に研ぎ澄まされた切っ先の寒気が、今夜を境に厳冬に入った事を音も無く告げている。私は、星の意思によってまだ此処に生かされている。そして意思の繋がりであるこの森は変わらず私が在る事を受け入れ、醜く無残に、摂理に沿って老いた枯葉の様な私の翼でさえも、この厳冬の夜に浮く白く澄み切った月光と共に、全てを包み込むように温めてくれる。私の目の前にある、流れる溶岩の様に激しいうねりを伴い、異形に成長したブナの巨木は、私が初めての狩りをし、この爪で世界を切り裂く事も出来ると力に溺れた日、獲物へと妖艶に広げた翼で滑空する事に強烈な刺激を覚えた日にこの場所に根付いた。そして私がアイヌからコタンの守を願われ、コタンクルカムイとして最高位の信仰と崇拝、そして共に在る者としての共生をお互いに理解し合えた日に木霊が宿った。そして、南より私と共に在ったアイヌとは異質のアイヌが来航し、殺戮と淘汰、同化が始まった年に私の見守る中で枯死し、木霊は星に還った。果てしなく長い時間をこの、死しても尚此処に聳える巨木の木霊は、星に還るその時までずっと、私の身近な話し相手として尊く愉快的な友人で在ってくれた。木霊の宿る木は強烈なカリスマ性と呼べる個性を持ち、時としてその個性はアイヌの魂をその意思の中へ奪い去る事もある。木霊の宿った樹は崇高であり、畏怖の念を持って神木とされたが、このブナの巨木に宿った木霊は気さくに良く喋り、私はこの樹の木霊と居る時間を心の底から愛していた。そして森に還る時を迎えた時も、ゆっくりと進む内部の枯死を感じながら、この樹の木霊は最期まで優しい顔をしていたのが、孤独になった瞳を閉じると鮮明に、其処にまだ在る様に思い出せる。大地に還って行く友人を見守り私も微笑んだが、心の底から語り合えた無二の友人が還って行くのは、やはり素直な寂しさを感じた。私は神としてこの森

に在り、崇拜の最高位として此処に在る者を監視し、見守ってきた。しかしそれは共に在ったアイヌたちの願いと祈りが創り出した象徴であり、具現化された形にしか過ぎない。無限に在る宇宙の全てに神と呼ばれる意思是宿り、私もその小さなひとつという真実の中に在るだけで、生まれ成し還る命の輪の中で、神では無く、星に在って生きる者としての摂理に素直に在りたいと思っていた。此処に在る事に素直でありたい。だから、創世より一瞬たりと止まる事無く流れている膨大な時間の中で、その中で出会えた友人との別れを、素直に寂しく思いたかったのだ。友人は、命を終え大地に還ったその時まで、屈託無い笑顔で在った。そう、アイヌの子供が同じ顔で笑うと気付いたのは別れの後だったが、私は自分が還るその時を待たずして友人にまた会えた様に感じ、まだ2つ在った瞳を閉じて静かに嬉しさを噛み締めた。もう、私は友人と同じ場所に還る時を迎える。この樹の木霊は変わらずに笑っているのだろうか。あるいは見違える姿で驚かせてくれるのだろうか。月光の降り注ぎ、全てが静寂の中にその明かりだけの輪郭を留めるこの森で、私は凍てつく空気が、時を迎える老いた身に温かく染み入ってくる不思議が、緩やかに心地良かった。幾億に在る神のひとつとして、このまま静かに還りの時を迎えられたなら、私はこの上なく幸福な形でその命を終えた。至極幸福で、満ちた命を生かされたのだと感慨に浸る。命を持って生まれる事が出来、神を秘めた個体として成る事が出来、一生の友を得、燃える様な激しい恋もした。寒空に輝く満点の星の下に翼を広げ風と語らい、夏は森の奏でる壮大な音楽に心の底から生命の情熱が溢れ出し、それを心に感じる事で気持ち高揚した。それは神というよりも、この星の、その中生きる者として悠久の昔より定められた安息の摂理を過ごせたのだと、命を終える今になって解る事が出来た事が途方も無く嬉しいのだ。満ちた時間を送れた事に感謝の念が溢れ、生かされた意味を受け入れ、私は長過ぎた時間の中で通り過ぎて行った幾つもの季節を思考の中で旅し、しばらく瞑っていた目をゆっくりと開いた。月光が森を青白く包み込んで

いる。私の瞳の前には、戻らない無い時を供にした友人の宿っていた、枯死したブナの巨大が聳えている。厳冬の静寂の支配の中で、森はいつもと変わらない景色を私の、かつては大きかった瞳に見せた。遙か昔、若いアイヌの抑えきれない好奇心で放たれた矢により片方が死んだが、私の瞳は今も光を感じる事が出来る。若いアイヌは応報という、私の望まない星の意思によって自らの光を奪われ、絶望の下で自ら命を絶った。コタンの長は神に矢を放った事が私の怒りに触れたのだと、冷たくなった若いアイヌの肉体を前に泣き崩れる、若い女のアイヌを諭した。痛烈に、鋭利な矢の様に心に突き刺さる若い女のアイヌの嗚咽は、一方の光を奪った矢よりもずっと痛みを感じたのを、私は何故今に思い出したのかが不思議だ。私は、共同体の中に硬く存在する信仰の象徴、その最高位に向かって矢を放ったあの若いアイヌを愛した。星の意思は時に残酷だ。私はやり切れない悲しみの中で、愛と希望を失った若い女のアイヌに数え切れない懺悔を繰り返し、その命が終わる時までずっと、いつも傍で見守った。あの2人のアイヌも、命の形を変えてまたこの星に還り、共に幸福な時を笑顔で送っているだろうか。あの木霊の様に、アイヌの子供たちの様に。神はアイヌに殺され、その本質を全う出来るのだ。それを行う事の出来る、若さだけが持つ事の出来る勇気を、私は真に愛していた。そんな事を思い出し、孤独だが光を感じる事の出来る一方の瞳を東の空に向けた。僅かに白んでいるのが、孤独の瞳にも淡い濃淡に薄らと映る。夜明けを前に空気は一段と凍てつき、空は漆黒の中にも蒼く深まる。1682回目の冬の冬を照らす月は幻想の景色に浮かび、この森を地平に広がるヴェールで包み込む。私はこの森に在った事が嬉しく、孤独の瞳より一滴の涙を落とす。涙は澄み切った氷の粒となり、大地に落ちる前に厳冬の温かな空間で花の様に弾け、そして無に還った。私は、一瞬であるが再び瞳を閉じ、そして流れ行くこの星の時を真似、緩やかに、しかし無限に湧く莫大な力を込めて、ゆっくり、ゆっくり、瞳を開いた。私は神としてでは無く、星と共に生きる者として在れた事を全身に感じ、

私は止まり木より大地に落ちる。微細な氷の結晶が煌めく空間に、私の痩せた羽が音も無く舞い散った。そして私は光を失って行く孤独の瞳に、枯死したブナの根元から小さな芽が生えているのが解った。屈託の無い笑顔が私を包んだ。

インスタント・ラブ／無くした恋に熱湯を／

「私達、もう終わりなの。離れた心は二度とは戻らないの。貴方が大切な人を傷付ける事が出来ちゃう人だって解っちゃった。大好きな人に傷付けられるのは辛すぎる。」

栃木と神奈川を繋ぐ電波は、銀河の果てに飛んでった女の心を、聞き慣れていた声を中折れのチッコイ電話機からプレゼントしてくれた。

「どんだけ好きだってよお、自分が辛い時は当たっちゃうって。当然だっつの。それ解ってもらわねーと男だって困るよなあ。」

栃木と東京を繋ぐ電波は、200?の距離を数?に感じるように呆気羅として、同じ電話機からポテチのように飛び出した。

結構将来を真剣に考えた相手との散々たる破局は絶望と喪失感で僕を奈落の底へと蹴落としたが、親友の言葉のマジックで僕はなんとか気持ちの切り替えを始めるスタートラインに立つ事ができた。

巨大な喪失感という心のクレーターを埋めるには、何かにひたすらガムシヤラになる事が一番のパテだ。

だから僕は戸棚の中にあるトップバリューの「しょうゆラーメン」を本気で作ってやろうと思った。

まず戸棚の扉を開ける前にファイティングポーズからの極限まで捻れを加えたコークスクリュー・ブローを放ちつつ、拳を開いて戸を開け放ち、視界に入ったシーチキン3缶パックの右に安置された「

しょうゆラーメン」に向かって一括する。

「貴様が親父をつっ！！親父をおおっ！！」

この「しょうゆラーメン」は僕の親父を無惨に斬り捨てた憎むべき宿敵。左手を滑空し鍵爪を獲物に突き立てるハクトウワシのそれに变化させ、容器を掴む。僕にはこの65グラムしか麺が入っていない、カスカスの「しょうゆラーメン」が悪逆非道の限りを尽くした人斬り野武士の首に見える。討ち取ったのだ、遂に。僕は一般的なそれより感覚で軽いと解る、シンプルすぎて味気ないパッケージのそれを、ハクトウワシのそれに変えた左手で高らかと天に掲げる。僕の瞳には、左肩から上腕を経て力強くしっかりと掴まれた「しょうゆラーメン」と、端が鉛が黒くなってそろそろ寿命な蛍光灯が鮮烈に映る。きっと乱世の空もこんな景色だった。

父の敵のパッケージを包んでいる透明なビニールを、容器を逆さまにしてテーブルの上に起き、底のへこんだ部分から両手で左右にカッ捌く。サキエルのATフィールドを侵食するエヴァ初号機になったつもりで行う。バツンッ、と右と左に裂けるビニール。僕は顎をいっばいまで開いて、初号機っぽく唸って、暴走した時に流れるBGMを自分の声で流す。僕は今、戦場にいるのだ。容器を元に戻し、フタを極限までゆっ……くりと、そろお……り、ピリ…ピリ…ピリ…と、糊をサディスティックに剥がしながら、その間「フタを開ける」事以外に雑念を捨て、目の前の目標に集中する。ピリ…ピリ…と、雪解けの始まった初春の野山と同じ速度で、その中で育まれる命の営みと全く同じ速度で、フタが開いてゆく。額から汗が吹き出して、頬を伝い、顎のラインから水滴となってテーブルに落ち、光の粒になって弾ける。それは川の成り立ちと良く似ている。幾億千年の時を掛けてマグマの台地に海が誕生したように、膨大な時間を掛けて水が台地を侵食しリアス式海岸ができたように、

フタも容器から剥がされてゆく。フタが中程まで剥がされ、中身のフライ麺とかやくとスープの小袋がその姿をこの世界に露にした時には、僕は脳の糖を全て使い果たして体重が3?減った。小刻みな震えを生じている手の力を振り絞り、まずかやくの袋を開ける。この袋を取り扱うには危険物取扱の資格がいる。かつて元が「鉄砲^{てつぱう}」として使用したものと、構造的には同じ銀色の小袋を、「どこからでも切れます」サインに惑わされず、自分の意思で場所を決めて開封する。氾濫する情報に惑わされてはいけない。乾燥したキャベツとか色々のお粗末な具を、細心の注意を払ってフライ麺の上に配置してゆく。上手く配置しないと片寄ってお湯に浸っていなく、食べる時に「あ、少し硬い」ってなる。お湯少なめ派の僕には尚更、この作業は重要な意味を持つのだ。具の配置を終了し、間髪入れずに粉末スープの処理に入る。粉末スープの袋なんかこうやって適当にぶちぎって麻薬のようにぶっかけちまえばいい。「えっ、スープこそ均等に振り掛けないと片寄るんじゃない?」って思った貴方は、優秀な人材だ。きっと出世する。貴方のその「気付き」は、きっと世の中に必要とされる価値を創造できる、サクセスの剣だ。僕はスープの振り掛け方にムラを付けて、味の濃い所と薄い所に溶け切らなかった粉末を任意に溶かしながら食い進めるって気持ち悪い食べ方をするから、粉末スープなんか遊びの女、もしくはカブトムシのように引き摺り回してやればいい。ただ、カブトムシは引き摺り回すと壊れるので加減が必要だ。危険物、スープ、一連の処理をぶっ続けて三日三晩寝ずに行うのが古よりの製法であるが、僕はそんなに時間を掛けて作る程暇ではないので、お湯はティファールを使って沸かす。カップ麺に使うくらいのお湯なら本当にあっという間にすぐに沸く。牛乳を入れると焦げるので注意が必要だが、馬鹿ではない人は湯沸し器で牛乳を温めようとは考えまい、だって馬鹿ではないのだから。朝露が薔薇の花弁から落ちるような時間で、水は熱湯となり、世界を変える希望となる。フライ麺と渴いたキャベツとか色々は、この煌めく希望で才能を開花させ、粉末スープという異文

化と交じり合ってルネサンスが起こる。僕は希望をまんべんなくキヤベツとかに振り掛けるように、回すように、お湯かけのプロになった気分で技術を發揮してますよ、的なモーションで注ぐ。フライ麺がギリギリ浸るくらいで止める。容器の内側の「ここまでライン」は14、5回に1回、ちゃんとライン通りにするかしないかで、逆にのカリスマと異名を持つ僕には社会のルールなんて破るためにあるのだ。大人なんて嘘ばかりじゃないか、尾崎だけが僕たちを解ってくれたんだ。僕は盗んだバイクで走り出したくなるやり場の無い苛立ちを無理矢理押し込めるように、ちゃんと熱湯を注いだ証の威勢の良い湯気を、社会という不条理の監獄、日本という閉塞の箱庭、または発泡プラスチック製の容器にフタを戻して押し込める。ちゃんと熱湯で作らなかった時はこの湯気の勢いはない。今回はちゃんと作るって決めたから、ちゃんと熱湯を使って作った、だから湯気がちゃんとあがる。それでいいのだ、世界はそうやって調和を保ち、地球という星は生命の旋律を奏でている。温いお湯で無理矢理作っても食べる時に熱くなくてスムーズに麺を啜れるだけで、この「ちゃんとお湯を沸かして作り上げた」という達成感は皆無だ。努力は必ず報われる。逆に、努力無くしての成功など有り得ないんだ。そんな事を思いながら、僕は戻したフタの先の小さくチョココンと飛び出てる部分を容器の縁の内部に折り込み、フタの上に箸を置いて「ちゃんとフタ閉じたのにパツカリ開いてる」不慮の事故に対し二重の対策を取る。カップ麺を作る過程での想定外は許されない、原発なら尚の事だろう。一連の過酷かつ経験が物をいう工程を経て、僕はしっかりとフタで閉じられた思春期の苛立ち、そして希望の元に華開く華麗な芸術文化、それらの総称である「しょうゆラーメン」を待つ。このカップラーメンは待ち時間4分だ。たいして中身入ってないくせして4分待たせるのは生意気だ。3分以上待つカップラーメンなど普段決して買わないが、これはひとつ35円の特売で売られていたトップバリュだから、まあ、しゃあないのだ。しゃあない、しゃあない。人生はしゃあないの繰り返しだ。しゃあないと

どれだけ不条理な目に遭わされても、微笑んで呟けるようになって初めて、僕はこのフタを開ける事ができる。僕は待とう。これから時間を、ティファールであつという間にすぐに沸いた湯水のように流れてゆく時間を、希望という名の超新星が柔らかい麵に戻るまで、安らかに待とう。そして時が来たならば、友のもとへ全生命を掛けて帰還するメロスのように、青春のクラウチングスタートで未来へ走り出そう。僕は眩しいトーヤ光の中で未来へ走る全裸の自分を想像しながら、疲弊した体に瞳をゆっくり閉じる。再び瞳が開かれる時が、「しょうゆラーメン」を食す時なのだ。そう、人はそれを、「4分後」と呼ぶだろう。それでいい。それでいいのだ…。

ほら、失恋なんて、カップ麺あれば忘れられる。命短し、恋せよ、人類…！

運命共同ネットワーク

今自分が存在しているこの世界とは違う世界へ行ってみたいと思った事がある。1度や2度じゃない。

寝る間際とか風呂入ってる時とか、宝くじに当たった妄想とか、色々あって自分しか居なくなっちゃった地球であれこれサバイバルする妄想とかと一緒に、今の自分が異世界に転生して今とは全く違う世界であれやこれや刺激的な体験をして、出会いと冒険のファンタジーの中で英雄になってチャホヤされる。そんな妄想に耽り何度現実逃避したかわからない。楽しいんだ、妄想の世界は、現実の苦痛が無いから。

でもずっと妄想の世界で生きてると、最初は気楽だけれど時間が流れて消えてゆくうちに物凄い不安と強迫観念が心のどっかからモヤモヤ迫ってくる。自分、このままだと現実に戻ったらなんも出来なくなるんじゃない…自分が痛みの無い世界に入り浸っているうちにも、世の中は確実に動いている…そんな事をモヤモヤさせたらもう、何か行動しなくては、ってどうしようもなく不安になって焦って、しなくても良い余計な事をセカセカし始める。嗚呼…自分、何やってんだろ、端から見たらこの行動、狂ってるよ。余計な事に躍起になり、我に帰ってドンヨリする。

こんな事やってんのって自分だけなんかなあ、回りの人が自分より一段も二段も優れて見えて、段々と自分が世の中のゴミに感じてきて、どうしようも無く消えなくなる。もうこの世界に居たくない、居ても何かに翻弄されて踊らされて追い立てられて、恥を曝しながら転げ回ってのた打ち回って嘲笑されて…頑張っても頑張っても辛い事ばかりで、「悪い事ばかりは続かないから」「頑張ればいつかきつと」って言葉を掛けられても信じられないし逆に自分が惨めになってくる。

明るい未来がやって来たって、やっと辿り着いた幸せを噛み締める

間も無く、まるで嫌がらせの様に困難が立ち塞がってくるんだもの、その度に不安で眠れない夜を過ごして、重く憂鬱な朝を向えて、そしてそれが永遠に続くような絶望感で心が疲れ果ててしまう。この世界は、何度でも立ち上がるのが英雄だとずっとずっと言ってるけど、立ち上がり続けても自分は英雄とか、全然呼ばれない。

自分は呆気無い程に、情けない程に弱い、この地球に居る生き物の中においても脆過ぎる構造を持つ、「ただのニンゲン」だからって色々投げ捨てたくなる。溢れている励ましの詩も、偉人の格言も、自分という、地球の生き物の中でも脆過ぎるただのニンゲンの中で、更に脆い存在には現実感の少しも感じられない、まるで異世界の言葉に感じる。

自分は境遇に恵まれない、どうやっても、何をしても、負の連鎖から永久に抜け出せない。

自分は周りの人よりもやけに不幸ばかりが起こる気がする。

何をやっても全ての結果が裏目に出る、上手くいってると信じていたのにやっぱり裏目に出るし、出た。

自分の決断する事は全て悪い結果をもたらす、悩んで考えて行き着くところまで絞り出して行動したのに…。

運命とか宿命が存在して、そういったどうにもならない意思に弄ばれてるようにしか思えなくなっ、自分の決断が全て裏目に出るから自分が段々信じられなくなっ、何かに怯えて見えない牢獄の中であた、何も生み出す事が出来ないで息をしているだけの家畜のような哀れな存在に思えてきて…気が狂いそう。

希望が溢れた未来を信じて、勇気を出して飛び出して、何をするにも自分の力で行動して、突破して、自分はこんな事まで出来るのかって、限界の殻を破って知らなかった自分に出会えて、充実した気持ちに心に大きな翼が生えたようだった毎日、やっぱり壊れて消えた、まるでシャボン玉のように。

あんなに必死になって生きた季節も結局は幻だったように感じて、自分を変える事に必死になって努力して、それに結果が着いて来て、

幸せで満ち足りて、世界が変わったように感じて、自分の力で環境を変えられた事がたまらなく嬉しくて、楽しい。

そんな自信も、いつかは壊れて消えるシャボン玉を必死に吹いていた幼い子供だったのかと、愕然とする現在に自分がシャボン玉のように弾け飛んでしまいそう。弾け飛んで、また何かに駆られて間違った方向に一目散に、盲目的に突き進んで自滅を招きそう。その恐怖で何をどう判断して良いのかわからない。

自分を信じて、今までなんとかやって来られた。でもその、実績と呼ぶような自信が全て粉々になって、自分の力ではどうにもならない場所にまで、輝いていた景色を碎き消した。そんな季節を乗り越えて、倒されてもまた立ち上がって、奥歯が擦り減るぐらいの苦痛と気が狂いそうな恐怖に、本当にボロ雑巾のように傷を受けて、それでもどうして、自分の上にある空には光が射さないんだ…。

どんよりとした鉛色の厚い雲、どこまでもどこまでも広がる、荒廃した都市の風景が、自分の目の前に延々と、本当に永遠に続いているようだ…。歩いてても歩いてても、一向に光に辿り着かない。

暗雲の下で、自分の地図が自分の瞳で全く見えなくなって、必死に凝視しても見えなくて、泣きたくなくなるくらいに、全く何も見えない。自分の景色が、何も見えない。光が無い闇の中で、自分の姿さえも見えない。未来も、希望も、見えないんだ。

嫌だ…、嫌だ…、嫌だ…。光が欲しい…、光が…、眩しい光を少しだけ目の前に、少しで良いんだよ…、それに向かって走り出したいんだよ…、この底知れない闇から抜け出したいんだよ…、闇に食われたくないんだよ…、怖いんだ…、怖いんだ…。

縋りたい。
救われたい。

絶望の無限軌道から解放されたい。

恐怖だけが待っている、長い旅路をひたすらに歩いて、やっと辿り着いた安息の場所と思えた此処も、恐怖が悪魔のように微笑して、いつも立っている。

現実が…、判断が…、他人が…、自分が…。全てがもう…心から信じられない…。

戦おうとして腰を据えるけれど、拳を構えるけれど、見えない何かに足をすくわれて泥濘を転がり、戦う前にもう、憔悴してしまうんだ…。

どうしたら良いのか全くわからない…、もう何が正しいのか、何をしたらいいのか…、全てがわからない…。未来が怖くてしようがない…。幸せに辿り着いたようでまた見せ掛けのものだったら…。その時の自分は立ち上がる事が出来るんだろうか…。わからない…。わからない…。嗚呼…、辛いよ…。苦しい…。

数千年も昔から、僕らはずっと消える事無い苦しみから救われたくて、自分の力ではどうにもならないから神様に頼るしかなかった。きっと数千年の昔を生きた僕らも、自分の力でなんとかしようと必死になって頑張ったんだ。泣きながら頑張ってもどうにもならなかったから神様が必要だったんだ。

でもほら、周りを見て。

同じクラスの、いつも幸せそうにしてるアイツ。

向かいのアパートの、仲睦まじいあの一家。

あまり話した事がない、異性にモテモテの同僚。

みんな絶対、苦しんでいるよ。

苛つく程バカ笑いしてても、キレそうな程はしゃいでいても、癪な程ニヤけてばかりいても、マジでウザい程くだらない事ばかり言っても。言い切っても良い、絶対、何かに苦しんでる。

自分が信じられなくなっているんなら、無理して信じようとしなくても良いよ。自分が信じられなくなったら終わりとか、一番信じなきゃいけないものだとか、あの人のその言葉に辛くならないでとことん疑ってやれば良いんだよ。

自分なんて、疑ってても案外消えないよ、だから大丈夫。でも、これだけは信じて欲しいんだ。

僕は信じる事が怖くてしょうがない。自分がそうだから、適当な事は言いたくない。真摯に、進撃に、敬意を込めて言うから、ほんの1ミリだけで良いよ、少しだけ信じてみて欲しいんだ。

アイツも、アノコも、カレも、カノジヨも…みんな、絶対に、何かに苦しんでるよ。

そう信じていると…、信じなくても良いや、少し思っているだけで、もう神様さえ信じられなくなって、なんか気持ち…、楽にならないう？ただそう思うだけで、孤独じゃないってホッとしないう？目糞鼻糞だとか、ドングリのナンタラだなんて、もしそうやって誰かに蔑まれても別にほっとけば良いじゃない。ソイツだって何かに苦しんでるよ。

住む場所が違う、顔も見たくない、生理的に無理、行動全てがストレス、死んで欲しい、…許せる許容範囲はあるけれど、自分の周りに居るソイツらだって自分と同じ、上手くいかなくて苦しくてそうなっちゃったんだよ。

何かに苦しんでるのは一緒、そう思うだけで少し楽だし、少し安心するし、それも一緒だと思うよ。みんな繋がってるって言われても、そんなの見えないし実感無いし、それが目に見える世界に行った時に解れば充分だよ。まずは自分が少し楽になる、アイツも苦しんでんだって、そう少しだけ思うだけで。

それで良くない？

…え、…もしかしたら、こう思うの僕だけ…？いや…、そんなはずは…。

いや…、もしかしたら…、僕だけなんじゃ…、うそ…、僕だけだったらどうしよう…、「そんなはずないさ、みんなそう思ってる」、とか思い込みでマジで僕だけだったらどうしようっ…、どうしようっ…。

結局いつもこう。でも、明日も僕はそうやってネチネチ苦しみが

ら、それを隠して生きてます。今更なんなの？ 的な事だけど、なんか、無性に吐き出したくなりました。

さて…、そろそろ苦しみの無い異世界から、ウルトラに苦しみだらけの現実に戻還します。家族、仕事、人間関係、いつまでもハイパーにまとわりついてくる忌々しい因果…、僕だって例外なく、何かに苦しみまくってるさあ…。

あー…、憂鬱。

レッツゴー、トーゲンキョー！

アイアンマンのような顔をした特急の快適な椅子、そのリクライニングを一杯下げて、窓の向こう、高速のスクリーンで巻き取られてゆく様な、夜の景色を眺めている。街の色々な光が流れ星みたく後ろに飛んで行って、徐々に田園が広がる牧歌的な光景になるが、車内の光が窓に反射してる上に暗くて良く見えない。浅草のキオスクで買った柿ピーと超ロングセラーのアルコール度数7だか8だかの缶チューハイを窓枠に設置し、ポリポリ・ゴキユゴキユやりながらローカル線の醍醐味を味わいつつ、僕は今回の土日で身も心もリフレッシュして、月曜からまた営業成績アップにハッスルすんだって、心の中でそれはそれは硬く、石膏のように決めていた。絶対的に、骨の芯まで休むんだって、誰が何言おうが世界がどうなろうが、駅のコインロッカーに預けといた、前日にキッチリ用意して会社から直行でレッツゴー出来るお泊まりセットを引っ張りだした時に、国旗の前で右手挙げて誓ったんだ。今の僕は揺るがないぞ。もちろん会社の携帯なんて電源OFFだ、今の僕の時間に、仕事関係の介入など断じて許さないぞ。「〇〇の在庫無い」だの「サービスマンの手配にミスが」だの、そんな砂漠の嵐や衝撃と恐怖になど微動だにしないもんねだ。月曜出社してどんな文句言われても、僕はもう今回の土日はちよつと良い旅館の、ちよつと良い温泉と、かなり贅沢なおもてなし料理で気力体力全回復するって聖書に手を置いて神に誓っちゃったから、もう駄目よ、無理よ、僕は誰にも止められない。そんな事を1人で、頭の中で誰に向けてでもなく高らかに宣言してニヤニヤしながら、柿ピーをポリポリ・feat 缶チューハイゴキユゴキユ+ローカル線のパーフェクトハーモニーに楽しくなってる来た時に、そろそろ終点って車内アナウンスが流れた。僕は会社から直行で、わざと酔いを早く回らせるために空きっ腹で缶チューハイを飲んだ事での、フラフラとした心地良い気分の中で立ち上

がり、上の荷台に乗せていたお泊まりセット一式が詰まったスポルディングのスポーツバッグに両手を伸ばして、自分の脇の席に勢い良く降ろした。高校の時に「ブギーポップは笑わない」ってライトノベルの影響で買った、今では底にβ・クリソゲノム、つまり青カビが若干生えちゃったけど、なんか使い続けてるこのバッグにはお楽しみを快適に過ごすためのアイテムがぎっしり入っている。2泊3日分の着替えの下着と、溢れんばかりの漫画本。僕はこれで旅館での夢のような「呑気」を、温泉と豪華な料理と温かいおもてなしの中で、誰にも邪魔されず堪能するんだ。バッグがパンパンになるまで詰め込んだこの全初版、藤子不二雄ランド・まんが道全23巻とエスパー魔美全9巻を読みながら、自分は旅館に缶詰めになった漫画家のような気分で漫画を読むんだ。中央公論社の藤子不二雄ランド、セル画付き初版本を誰にも邪魔されず、夢の時間の中で読むんだ。部屋の窓の外に流れる川と、絶景の中に染まる紅葉とか見ながら、お猪口で酒をクイツとやりながら読み耽んだ。それがしたいから3ヶ月前に多少良い旅館の、ちよつと奮発し過ぎた良い部屋を予約したんだもの、読むんだ僕は。「もったいないよ、外に出だしなよ」「せっかく温泉街に来たんだから」とか、思うのは当然だけれど口にしない事。宣戦布告になるから。それをしたから僕はそこに向かっている、なら、良いでしょ。妄想の中で刃向かってくる誰とも無い、別に特定の人間でも無いモヤモヤした、名探偵コナンの「まだ誰か解ってない犯人」みたいな人影に対して1人で言論している、「ご乗車の皆様、本日は〇〇線特急〇〇にご乗車頂きまして」ウンチャラの、桃源郷への到着を知らせるアナウンスがスピーカーから流れ、僕は魅惑的なパンパンのスポルディングバッグを左手に、右手に営業カバンを持って、酔いも良い感じに落ち着いたポカポカの体に残った柿ピーを華厳の滝の様に口から流し込み、ルーズに緩ませた西陣織りのネクタイを適度に締め直した。アイアンマンにクリソツの迫力フェイスな特急は徐々に速度が緩やかになり、同じ車両に居合わせた乗客たちも下車のための行動に忙しく

動いている。背伸びだのアクビだののリラックス仕切った声がチラホラ聞こえる。貴方らもこれから、各々の至福の休暇を過ごすんだね、僕と同じこの温泉地で。全く知らない人たちだけれど、なんか一体感を感じながら、僕はパンパンのス波尔ディングが座席にバスンバスン当たっても気にせず、車体が止まり掛ける瀬戸際のキーッて金属音が響いた中で、ブレーキの慣性で前に若干加速する体を脚で踏ん張りながら通路を歩き始めた。着いたっ、着いたっ、ヒヤッホーッ、心の中でスキップする。休暇に列車を使って、目的地に着いて降りる間際が一番心が踊るぜベイベーツ。僕は瞳をキラキラに輝かせ、少しだけ残るアルコールとテンションの高まりで赤らんだ頬で、バスンバスン椅子に当たるパンパンの充実装備ス波尔ディングをしっかりと持って、悦楽のエルドラド・至高のガンダーラに今…、降り立つよっ！キターッ！！

列車とホームの間が案外開いていた。

僕は足を踏み外して、右足から落ちてその間に挟まった。

ス波尔ディングのバッグが蛍光灯光る孤空に飛び、そのまま線路の方に飛んでった。

流れ星みたい。

硬いもの同士の間挟まっちゃった右足は、スーツのズボンがぶっ千切れちゃって、ちよっと怖くなるぐらいに、血ミドロ。

乗客の女の人とか叫んじやうくらいに、結構、地味に惨事。

痛いし、恥ずかしい。

駅員さん来ちゃった。

救急車も来ちゃった。

僕は担架に乗せられて。

クルクルと走馬灯みたいに。

回れ回れメリゴーラン、って感じに悲しく回る赤色灯の光を浴びて。たくさんのよそ行きのグルーピーに見守られながら。

ピーポー、ピーポーって鳴る車に乗せられて。

桃源郷の総合病院に救急搬送されました。

線路という忘却の彼方に飛んで行った、一閃の流星になったスポルディングのスポーツバッグ。

松葉杖姿で退院し、会社にしばらく自宅療養となった事に謝罪の電話を入れ終えた後に、駅で預かってますって電話を頂きました。あっという間に、月曜の昼になってました。

もっと早く届けてくれれば、桃源郷でゆっくり漫画読めたのに。病室だけど。

軽く溜め息ついて紅葉を見ると、散ってました。
あはは。

なんだこれ。

我が名はニャンコ

我が名はニャンコ。

太古の古より神聖なる使徒として混沌の地上に在る。我々は高貴にして自然。自然にして高貴。

群れず媚びず染まらず、汝らの傍らに在り監視する宇宙意思。崇め祭れ、さらば与えん…。

今日は良い天気ニャ。

お日様がサンサンとあったかほっこりな日射しをくれるニャ。

アタシがこの家に来てからもう一年半くらい、このめったに使わない、野菜と調味料置き場になっちゃってる無駄に豪華なお客様用リビングの、無駄にアンティークなソファアの上が木漏れ日のベッド。アタシはここが一番気に入ってるニャ。ここでぬくぬくのお日様浴びながら寝まくるのが、日中の日課ニャ。

アタシには消したくても消えないトラウマがあんニャ。前の飼い主は、まだ産まれたてのアタシを寒空の下に捨てたニャ。アタシ、何をどうして良いのかわかんなくて、お腹だけは減ってて、とにかく何か食べたくてトコトコトコトコ、冷たいアスファルトの上を歩き回った。ずっと、ずっとニャ。途方も無くずっと、ずっと…。その内にアタシの上を、何か黒い、鋭い嘴の鳥が鬱陶しくまとわりつくようになったの。そいつらはアタシの小さな、汚れ切ったゴミクズみたいな体を、少し離れた場所からいつも狙ってた。漆黒の闇みたくに底知れない塊に、いつもギラギラ妖しく光る目。アタシは後ろが怖かった、いつもいつも後ろが怖くて、一歩歩く度に振り返っては、いつあの黒い塊がアタシに向かって嘴を突き立てて来るのか、それが怖くて正直、気がおかしくなりそうだったニャ。アタシは凄

く怖い思いをしたニャ。だから今でも誰にも体を触らせない。アタシを触っていいのは、この家で唯一アタシにカリカリとジューシーの2種類のご飯をくれて、アタシがご飯食べてるのを傍でずっと見ていてくれるお母さんだけニャ。それ以外にアタシに触れてくる者は、無駄にアンティークなソファアをズタズタにしながら每晚手入れた、この研ぎ澄まされた爪が許さない。ニャ。

毎日毎日、後ろから決して前に追いつかない恐怖が着いてきて、アタシは憔悴し切って、可哀想なくらい汚れて弱って、痩せていたニャ。いつもお腹減って、何か食べれそうな物が落ちてる度にクンクンして。でもほとんど猫には食べれない物で、なんでアタシこんな惨めな身の上なのって、悔しくて鳴きたくなった事たくさんあったニャ。でも絶対鳴きたくなかった。アタシは今凄く惨めだけど、だから猫なで声でミャオミャオ鳴くのなんて、アタシのエベレストより高いプライドが絶対許さなかった。今アタシ、毎日夜の5時半になるとお腹が空くから、この家のお母さんに猫なで声で「飯食いてー」って、ミャオーンミャオーンってやってるけど、演技。本当のアタシは絶対に鳴かないよ、それはアタシがここから居なくなるまで変わらないニャ。

アタシはこの家の、今はもう5、6年付き合ってる彼氏の所へ同棲しに出ちゃった若い女に拾われて、恐怖と空腹の毎日から抜け出す事ができた。痛い注射とか、神社に行って供養みたいな事されたり、色々めんどくさい事に付き合わされたりしたけど、トラウマになっちゃってる怖かった毎日から抜け出す事ができたから、結論は良かったって思ってるニャ。あの若い女がアタシを拾わなかったらソファアでぬくぬくも、カリカリとジューシーの美味しいご飯食べる事も、この家のおじいちゃんが松ボックリ投げるのをダッシュで追い回したりもできなかったし、仏壇破壊したり五月人形バラバラにしたり、障子切り裂いたり米ぶちまけたりとの刺激的な遊びを楽しむ余

裕もなかったニヤ。この家の男らは面白いニヤ。アタシが何かを破壊する度に「あー」だの「まいったなあ」だの途方に暮れて、あからさまにげんなりするから面白いニヤ。でもだからってアタシをぶったり、叩いたりしなくて、猫だからしょうがないって猫の事を理解してくれてるから、尊敬もしてるニヤ。見せないけど。美濃焼きの焼酎サーバーって、この家のお父さんが大事にしたオモチャを棚から落としてセラミックの破片にしちゃった時なんか、お父さん悄気まぐっちゃったけど、アタシの事ぶたなかったもん。毎晩酔っ払ってアタシに馴れ馴れしく触ってきて、その度に高速パンチと手入れされた爪で手を八つ裂きにしてやってるけど、アタシの事ぶたないから案外、嫌いじゃないニヤ。ウザいけど。

天涯孤独のアタシには仲間は居ないけど、仲間に近い存在かなって感じてるのはお母さんニヤ。お母さんだけにはアタシの中々に上質な毛を撫でさせてる。お母さんがアタシに一番優しいから、色々許して上げてる。同性だから気楽ってのもあるかなニヤ。おじいちゃんはおかしいニヤ。いつも夜になると、どっから拾ってきた松ボツクリを廊下で投げてくれて、コロコロ転がってくカサカサの松ボツクリに、アタシの野生が呼び醒まされて、ダッシュで追いかけてやうニヤ。猫だから、動く物追い掛けちゃうのはしょうがないニヤ。アタシ肉食系女子だもん。おじいちゃんはお父シが廊下でリラックスして転がってる時とか、階段でボーッとしてる時とか、絶対声出してリアクションするからかわいいニヤ。アタシがコタツの中でぬくぬくしてる時とか、アタシの姿が見えないぞってリアクションを声に出してしてるから解りやすくてかわいいニヤ。あと、何げにアタシのタイプだったりする。アタシ職人気質に弱いニヤ。

アタシにとってそんな日常の、あの辛かった日々と比べたら本当に幸せで、温かい真心に満たされてるこの家。これ以上に何かを望んだら、アタシはきつとまた全てを失うんだろうなって、そんな怖さはいいつも心の底に渦巻いてる。見せないけど。凄く怖い思いをする

と、急に物が動いたり、急に体を触られたりするとビクッてなっちゃう、悔しいけど。でもそれは猫も人間も同じだと思ってるニャ。こんなに幸せな日々がアタシを包んでるのに、なんでニャろう、窓から外を眺めちゃう。この家の窓は二重構造の頑丈なガラス、その厚いガラスの内から、あんなに怖い思いをした外の世界を、いつまでもいつまでも眺めちゃうニャ。なんか小さい虫が飛んでたり、なんか知らない鳥がピーピー鳴いてたり、風で木の葉がガサガサ鳴ってたりすると、ガン見しながら目で追っちゃう。外の世界の色々な変化が面白くて、真剣になっちゃう。あそこに飛び付いたらどうなるのかニャ、あれを追いかけて回したら凄く楽しそうだニャ、そんな妄想で頭の中がいっぱいになって、真剣に目で追っちゃう。でもアタシ、わかってる。アタシみたいな性格の猫が外の世界に出ても、きつと周りが見えなくなって飛び出して、車に轢かれて死ぬニャ。刺激が楽しくて、新鮮な変化が面白くて夢中になって、絶対何かに轢かれて死ぬニャ。この家の中でだって、何度か尻尾踏まれたり、ダッシュして横切った時脚とニアミスして軽く蹴っ飛ばされたりするニャ、自分の事は自分が一番わかってる。だからアタシ、夢中になって眺めてるだけで良い。眺めてるだけで良いニャ。

でもきつと、この家の人間がもし、この厚い窓ガラスを開けっ放しにしたら…、そうしたらアタシ、きつと好奇心を抑えられない。車に轢かれて死んじゃうってわかってても、アタシはきつと、外の世界に出てゆくニャ。アタシの中のアタシを抑えられないよ、きつとだから気をつけて、アタシをよく見ていて、じゃないときつとアタシはこの家から居なくなるニャ。優しくて温かくて馬鹿で面白くて愉快で、アタシに幸せをくれたこの家の人たち。アタシ実は、超大好きだし、凄く感謝してる、ちゃんとしてるよ。でもアタシは、居なくなると思う、外の世界とこの家の境界が無くなった、その一瞬の隙に。アタシは油断ならない猫ニャ。だってアタシは猫。神聖な存在にして、神よりの使いニャ。高貴にして自然、自然にして高貴

の、ハイソサエティ、ノーブル、詰まる所セレブな存在ニヤ。野良でも飼いでも、ペルシャでもマンチカンでもシヤムでも三毛でも、アタシらは神聖な存在。崇めるも祭るのも勝手にやれば良いニヤ、それで美味しい思いできるなら良いと思うニヤ、アタシみたいに捨てられた猫がそれで幸せを得るなら、祭りたてる人間を利用するくらい姑息な手を使ってアリと思うニヤ。猫はそれであって猫ニヤ、そして、外の世界はそうやってサバイバルしないと、常に全てを疑ってないと、黒い塊にすぐ啄まれる。甘くないニヤ、猫の世界も人間も。

ぬくぬくの日射しがちよつと暑くなって、アタシはブーツとする頭のままで体を起こす。無駄にアンティークなソファアが、日射しとアタシの体温で温くなって、アタシはひんやりした場所に向かってソファアの上から飛び降りる。着地したと思ったら、目の前にこの家の長男が偶然、起きてきた。そして目が合った。アタシは今、寝起きで頭の意識が半分、天空にすっ飛んでる。この男はそれを見抜く。そしてここぞとばかりに頭とか頬っぺたとかを手でムシヤムシヤ触ってくる。アタシは内心「触んニヤ」って思いながらも、フワフワする意識の中で少し気持ち良いとも感じるから、しばらくムシヤムシヤ触らせてやるのニヤ。そうしてるうちに結構気持ち良くなってきた、アタシはそのまま絨毯にコテンツて横になる。するとこの男は胡坐をかいて、しばらくムシヤムシヤ頭とか頬っぺたとか顎とか、触ってる。アタシはそのまま、ひんやりした場所に移動するのなんかすっかりどうでも良くなって、また寝る。これが猫ニヤ、すなわち神。

我が名はニヤンコ。

絶対生物にして時空生命体。我ら汝らの主にして全知全能、宇宙意思の代弁者にして創造主よりの使徒。我ら汝らに問う。摂理の中に在るか。我ら汝らに問う。在るべきままに在るか。

ミヤオーン。

異質 in オブラート

人生で一番勉強した高校受験、そして受かった三流県立高校の、掃いて捨てるくらいどこにでも居る男子高校生。それが僕。

僕は例外無くあくびをしながらダルそうに登校し、好きな授業はちゃんと受け、嫌いな授業は睡眠時間とし、2時間目の休み時間は友達とくっちゃべり、昼休みはベランダでワイワイ飯を食う。

掃除は案外ちゃんとやり、下校間際に部活に向かう友達と廊下や昇降口で談笑し、NORTH FACEのリュックを背負って下校する。

僕は掃いて捨てるくらいどこにでも居る男子高校生。しかし僕には夢がある。僕は、世界一の品揃えを誇る駄菓子屋を、この田舎の商店街に創るんだ。

僕は帰宅部である。

世間一般的に帰宅部には根暗で陰険な、やりたい事の無い者が選択する、学生時代に青春を謳歌したくない者が辿り着く偏見が、部落差別という土農工商の亡霊と共に存在する。しかし学校に内緒でバイトをしなければいけない事情に在る学生には、幾らか寛容な眼差しが向けられ、僕もその眼差しの中で「今日バイトだよー」とかダルそうに吐いたりして、幸いにも自分の居場所是在る。

僕は平日の月曜、木曜と週末に、地元の団子屋でバイトをしている。此処の団子屋は時給800円で昼飯は団子屋が発注してる蕎麦・うどんおかわり自由十日替わりおかず付き、しかも朝は1杯350円取っている水出し珈琲が無料で飲めて、仕事も大した事無い。友達の紹介で始めたバイトだが、実に割りの良いバイトだと思っている。僕にはまだ納税義務が無い。バイト代は全て手取りになる。僕は月のバイト代を半分は将来、駄菓子屋を開業するための元手、半分は地元の駄菓子屋に還元する事になっている。地元で得た金は地元に戻

す、地産地消は共同体維持の大切な基本であり、大量消費時代で忘れがちなユニティーだと思っている。だから僕はコンビニやチェーン店で買い食いはいしない。

僕は例外無く下校時に買い食いをするが、このシャッター街と化した閉塞感漂う地元を、商店街の一角にある古参の駄菓子屋「はらだ」で買い食いをする事で、非力ながら地方経済活性化に貢献しているつもりだ。

僕が小学校低学年の時から此処にある「はらだ」。

僕が初めて下校中に買い食いしたのは、忘れもしない小学3年生の時だった。僕は「ならぬ事は、ならぬものです」という白虎隊の教えを忠実に守る、絵に書いた「しっかりした子」だった。その日僕は先月に転校して来た、クラスの全員を泣かせた「いじめっ子」と一緒に下校していた。

僕は集団での差別とかイジメとか、小学校に入学する以前の幼い頃から虫酸が走った。

「なんでみんな仲良く出来ないのか、仲良くすれば良いのに」と思っていた。世代を越えて、コミュニティを創り異端者を共通の敵とする事で、自らの共同体を維持する行為が在る。クソだなんて、ずっと思っていた。孤独に耐えられない者が群れ、自身の存在意義を馴れ合う共同体など吐き気がしたし、不気味だった。だから僕は、俗に言う「はぶられた者たち」とも別け隔て無く遊んだ。だってその方が楽しい。だから小学3年生にしては大きな体付きをし、ギラギラとしているが何処と無く孤独感の在る目付きをしたこの「いじめっ子」とも、一緒に仲良く下校する。

その日も全く思いつけないけれど、実に色々な話をしながらこの「いじめっ子」と下校した。そして拾った。100円玉を。

僕は白虎隊の更に少年隊。「交番へ届けよう」と主張する。しかし「いじめっ子」は「はらだでうまい棒を10個買って、5本ずつ分けよう」と言った。自ずと意見はぶつかり合い、結局白虎隊だけだと押しは弱かった僕は根負けし、その想定外に得た金銭を「はらだ」

で消化し、うまい棒を10個買って5本ずつ分けて食べた。今思えば、これが正に不良への入り口であり、僕の人生のターニングポイントとして宿命が用意した必然だったのだろう。

僕は駄菓子的美味しさに魅力された。それまでもお小遣いを貰って駄菓子を買っていた。駄菓子を買ったのは、この時が初めてでは無い。しかし、この拾った100円で友達と分け合って買った「うまい棒」の味は、魔性を秘めた禁断の果実という表現でしか表せない程、美味しかった。ただ、「美味しかった」、無性に。そして果てしなく。

「拾ったお金を交番へ届けずに、それで友達とお菓子を買って食べている」、この罪悪感から得体の知れないスリルが生じ、幼心に「悪い事をしている」という背伸びした感情は、うまい棒の多々ある魅力的なフレーヴァーのどれよりも刺激的で、僕はこの時に食べたうまい棒に心を奪われた。

メフィストに魂を売って一切れのパンを得た、極貧相の市民。

人を殺めてまでに、重労働従事者が飲みたかった1杯のビール。

そして拾った100円で友達と分け合った10本のうまい棒。

全てに魔性が宿っている。僕は「いじめっ子」と貪り食ったうまい棒に魂を魅力され、将来絶対に他の追随を許さない、自分も買って食べたい駄菓子を圧倒的に網羅した駄菓子屋を創ると、悪魔の契約書に消しゴム判子を押した。

だから部活というコミュニティに属さず、僕は契約を全うする為に、資金をバイトで稼いでいる。買い食いも「はらだ」でしかない。

優れた経営者として存在し、新しい価値を創造するには孤独に耐える勇氣が必要だ。顔を拡げる為のコミュニティ、パーティー、全てに置いて本当の人脈など生まれない。果ての無い孤独に耐え、想像を絶する苦難を乗り越える中で用意された必然とぶつかり合い、鍛練され、研磨されて出来上がった絆だけが本物だ。それは得ようとして得られるもので無く、追い掛けて掴めるものでも無い。自分が自分の目的と目標に向かい、直向きに進撃に、頑なに果てしなく邁

進する事で初めて、運命が用意してくれる奇跡だ。

まだ人生なんて微塵も考える事も無かった、真っ白なカンバスの上で自由に生きていた、あの日の僕には「いじめっ子」が用意された。そして僕は用意された「いじめっ子」によって、駄菓子子の権化となった。稲妻の走る暗い空の下、古びた洋館で交わした契約書。その皺がれた紙面に押された消しゴム判子から夢が生まれて、夢は目的と目標に変わり僕を邁進させる。僕はごく普通の男子高校生。普通の高校へ通い、普通のバイトをし、普通に友達と談笑している。

普通の中には異質が隠れていて、普通とはそれを包むオブラートの様なものだ。「きびだんご」を包むオブラートの様なものだ。本当の異質は、オブラートにしっかり包まれて時が来るまで決して姿を現さない。完全なる異質は、未熟のままに正体を光に曝したりしない。ある日突然に、そして強烈に現れて、それまでの世界を一瞬にして変える。あの日拾った100円玉のように人の人生を変えるような衝撃を、しかし静かに携えて商店街の一角に悪魔のように微笑みながら、ただ其処に在る。そんな駄菓子屋にしたい。

「なんだこの駄菓子子！」「こんなものまであるのか!」、そうやってあらゆる世代の人を楽しませ、その中にあるあの日の僕のような存在が1人でも生まれる、そんな駄菓子屋を創りたい。異常な普通の中に在り、完全なる異質。僕の人生感を決定付けた駄菓子子、その本質を具現する店を僕は創り上げる。必ず。

今日も僕は野心をオブラートに包み、下校からの「はらだ」という夢の途中の寄り道を楽しむ。今日は金曜日でバイトも無いし、地域経済活性化に貢献する日なのだ。

つか、小難しい事無しに、駄菓子子が食べたくて食べたくてしょうがねえんだ。能書きだよ、今までの文章なんて、「駄菓子子が大好き」だから「世界一の駄菓子屋やりたい」、それで片付けられんだ、実は。真実はいつもシンプルであり、シンプルの中には洗練があって、僕の人生感なんて詰まる所「駄菓子子」なんだ。

シンプルな様で胸焼けする程クドく、余計なもんばっかでもなんか楽しくて、バリバリ着色されてガンガン添加されて、体に大打撃でもある日無性に欲しくなる。だから駄菓子はやめられないし、僕の人生もやめられないんだ。楽しくて。

「NO DAGASHI NO LIFE」、そんなステッカー創って携帯に貼ろうかな、そんな事も若干思いながら「はらだ」の前まで歩いて来た。

今日は200円で「ビッグカツ」と「梅ジャム」＋「サラダ煎餅」、
「どん太郎」を3袋に「すもも」、金が余ったら「5円チョコ」でも適当に買おっ。今日はおばちゃんオマケしてくれっかな、10年くらいずっと通っててもたまにオマケしてくんない日があっからな、などの算段を立てて、いつもの木製のスライド式の扉をガラガラと開けた。

「お待ちしておりました、タカシ様。」

通い慣れた其処には、見慣れた白い割烹着を来た、ホッペの下にホクロがあって笑うと金歯がチラチラ覗く、いつもの優しいおばちゃんは居なかった。

金髪で白いタキシードを着た丸いサングラスを掛けた、僕の名前を知っている若い男が、あの日から変わらず、ずっとカビ臭い「はらだ」の店内に軽く微笑みながら立っていた。僕は頭の中が真っ白になった。シンプルに、訳がわかんなかった。

「タカシ様。誠に末永く、この特務機関・皇立文化肅正隠密同心…、いや…、はらだをご利用頂き有り難うございます。本日晴れて、タカシ様のはらだポイントが100万ポイントを越えました。このポイントはタカシ様を皇立文化肅正隠密同心の志士として認定する事で還元させていただきます。では、こちらへ。」

割烹着ではなく、上質な白いタキシードを来た金髪の男が、ジョン・レノンがしてるような丸いサングラス越しに目を細めたのが解った。相変わらず微笑んでいるが、僕にはそれが良い意味でのものなのか、何かとてつもない悪意からのものなのか、はつきりしなかった。駄菓子味のようにはつきりしなかった。

ただ、「いじめっ子」と分け合って食べた「うまい棒」のような、得体の知れない衝撃が身体中を包み込んでいたのだけは、はつきりとわかった。

普通から、異質が遂に姿を現した。

グラスハート・ボーイ&プロミネンス・ママ

「お兄さんっ！この後遊ぶ場所決まってるんすか？！うち、女の子にめっちゃ自信あるんすよ！最初は2時間飲み放題4000円なんですけどどうですか？！3000円で良いっすよ！マジ、女の子はこの界限で一番だって自信ありますよ！！」

キャバの客引きの、コーンロウのイカれたレゲエ歌手みたいなあんなちゃんを無愛想にかわして、僕は路地裏の雑居ビルへ向かっている。僕の目指す目的地へは、この中途半端な歓楽街の、特に水商売が密集した路地を越えなければならぬ。道幅が狭い上にたくさん的高級車が露骨に路駐され、そこをジグザグに通り抜けてゆく過程で、越冬中のカメムシの様に要所で群がる客引きのあんちゃんも上手くかわしていかないとならない。物凄く億劫だが、業に入は業に従えであり、悠久の歴史が中途半端にある「歓楽街」のルールは乱してはならない。

でも、やっぱりウザい。

「シャチョーサン！イイコト1000エンダヨ。1000エン！ペロペロ、シコシコバリウマイヨ。1000エンデダイジヨブ。サービスマンテンスルヨ。1000円、スグデキルヨ！」

国籍不明の、スタートレックの特殊メイクみたいな化粧をした年齢不詳の女も、この道程でわんさと声を掛けて来る。本当に昆虫の様に。僕は手を大仏様のポージングにして、はっきり「NO」とだけ言う。お互い、無駄な交渉はしない方が良い。僕は「見込み無し」の通行人だ。それは身なりで解るはずなんだ。高級スーツも腕時計もしていない。取り巻きも居ない。薄汚れたパーカーに皺だらけのキャップ姿の若造が、絶対にシャチョーサンなわけ無い。例外はあ

るかもしれないが、良く人を見て物を言えよ、って歩きながら心で喝を入れる。あくまでも、心で。

そんなイタチゴッコの行程を経て、僕は「いかにも」な雰囲気の雑居ビルに辿り着き、意味不明な異臭のこびり着いた狭いエレベーターに乗り込む。勿論、階層表示に店舗の表記など書いていない。

一般的に「怖くて入れない」佇まいのこの雑居ビルには、僕の生きる糧が人知れず、光を逃れ存在しているのだった。そう、全く持つて人知れず、に。

僕は、オイルや金属のカスでみすばらしく汚れた白いパーカーのポケットに両手をつ込み、様々な臭いが渾然一体になった、急激な吐き気をもよおすエレベーター内で、ただ、上がってゆく光る数字を見つめる。

僕は6階で降りる。6階以外に何がこのビルに入っているのかなんて知らないし、知るのも恐ろしい。何かを知る事には責任が発生するから、僕は余計な責任なんか負いたくないし、面倒な事は一切御免被りたい。幸い、初めてこのエレベーターに乗った時から現在まで、他人と相乗りになった事が一度も無いのが救いだ。：それも不気味な事だが、人間嫌いな僕には都合が良い。非常に都合が良い。

1から6まで数字が上がってゆくのを、僕はただぼーっと見つめる。この空間でやる事はそれぐらいしかない。エレベーターの中で楽しく過ごす方法なんて誰も考えない。ただ、上がる数字を皆で見つめる。同じ方向を、一丸となって見つめる。世界の人々がエレベーターの中と同じ様に、平和に向かって同じ方向を一丸となって見つめられれば、悲劇的な現実は変わる筈だ。エレベーター内では出来るのに、星の上では何故か、出来ない。

僅かだが無限に感じない事も無い空虚の時を過ぎ、何処の会社が造ったのか解らない異様に音の大きな狭いエレベーターの扉が、壊れるんじゃないかと不安になる程の異音を上げて開かれる。

僕の生きる糧が、チーク材の西洋風な扉を静かに構え、唐突に目の前に現れる。

僕はポケットに突っ込んでいた両手を右手だけ出して、緑青で処理された蒼い銅製のドアノブを下げ、前に向かって静かに扉を開く。クレ556を鏝にスプレーしなくなるなってムラムラする、「ギイッ」と軋む錆びた金属音が狭いフロアに鳴り響き、僕の目の前に椅子が3つしかないカウンターと、その異常に狭いカウンターの向こうで既にレーズンバターを作っているママが姿を見せる。

もう5年近く通っているはずなのに、その素性の一切わからないママは、メートルが着ている黒のコートみたいなフワフワの服を身に纏って、ロックアイスの上に金太郎飴みたいなレーズンバターを綺麗に切り揃えている。そして手を止めて、入店した僕の方へ視線を投げ掛けると、未だ底知れなく真意の解らない微笑みを浮かべて、初めてこの店にやって来た時から一切変わらない来客の挨拶を、今日も変わらず僕に言い放つのだ。

「来る頃だと思ったよ。レーズンバターね？」

初めて来た瞬間からレーズンバターだった。でも僕はレーズンバターで良くて、レーズンバターでしか有り得なかった。

「うん！レーズンバター！」、僕は心で、あくまで心でそう元氣良く、小学男子のそれに似た返事を返し、黙って3つある席の左端に座る。真ん中は落ち着かないし、右端だと壁が邪魔で利き手の右手の自由に億劫さがある。僕は絶対、左端なんだ。左端が開いてないと帰る。でも初めて来店した時から、この店で他の客と相席した事が1度も無い。異様に不気味な事実だが、5年も経つと差ほど気になる事実では無くなるのだから、環境への慣れとは恐ろしく、そして奥深い。

ダマスカス鋼の様な波打つ模様の木材を使ったやたら重い椅子を引き、僕は沈黙を保ち席に着く。するとママの、フワフワのリアルファーンなのかママの表皮なのか全くわからない、黒い腕が目の前のカウンターに伸びてきて、スワロスキーのロックグラスに注がれた「はちみつレモン」が、透き通る氷を溶かして心地好い音を奏でる。

「特別甘く作ったよ。はちみつもいつもより甘いよ。レーズンバターね。」

黙ってテーブルを見つめる、キャップを目が見えるか見えないかまで深く被った僕の目の前に、お通しのレーズンバターが優しくも妖しく、妖艶に置かれた。丸く切られた濃厚なバターが、小さくも芳醇なレーズンに母なるコーティングしている。奇跡のセッション、そして魅惑のコラボレーション。

キラキラと輝く「はちみつレモン」と、その隣に置かれた宇宙船の様な見た目のレーズンバターに、僕の心の奥底から何か得体の知れない「者」が込み上がって来る。僕自身もコントロール出来ない、僕であって僕で無い、「者」。日常で決して出現しない、此処でしか出会えない、僕であって僕で無い、本当の「僕」。

「今日の星はどうだった？」

メーテルの服を着た「ママ」と呼ばれる宇宙意思が、僕に向かってモナリザの様な、天使と悪魔が混在した無限に広がる微笑を振り向ける。

僕の心がバーストする。オーストラリアのアスファルトを1000?以上スピードを出して走り、熱で破裂したタイヤの様にバスンツと弾ける。

僕は勢い良く、創世記の星の様に黄金色に輝く「はちみつレモン」を飲み干して、未知との遭遇で人類の目の前に降臨した母艦の如き様相のレーズンバターを、至って普通の「つまようじ」でかつ攫う

ように喰らい、そして、滅多に開かない口からそれ以上に滅多に発さない言葉という空気振動をぶっ放す。

トミーガンで銀行を急襲した、禁酒法時代のギャングの様に。ブラックホークに装備された、地上を焦土と化すミニガンの、その様に。或いは、この星のカンブリアビッグバンの様に。要は、爆発的に。

さっ、生きる糧の時間、満喫しますよ。

「もうやだっ！やだやだやだっ！かなしいこといたいことばかりだ、このほしっ！！しればしるほど、もうっ、やだやだやだやだあーっ！あのねっ、あのねっ、きょうねっ、またねっ、ちいさいおんなのこがかいおとこにらんぼうされててねっ、そのとなりでわかにおんなのひとがおじいちゃんのかびをしめてねっ、おとうさんはおかあさんをさしてっ…、おかあさんはちいさいおとこのこをおもいっきりぶってっ…、おとこのこはおとうさんのあたまをかたいバットでなぐってっ…、おんなのこはじぶんのてくびをきってっ…、そんなへんなことがもうっ、ふつうになってるんだよっ！おかしいよっ…、こんなのないよっ…、こんなほしくないよっ！こんなっ、こんなくるったほしでわらってるチキュージンってっ、やっぱりくるってるよっ！5000ねんたってもやってること、ぜんぜんかわらないんだよっ、おかしいよっ！おかしいよっ！！あーもうコキョーにかえりたいっ。こんなほしやだっ。べつのほしにはいればよかったっ…。ちくしょうっ、ちくしょおおっ！！」

「はい。おかわりね。」

僕は5000年前から、故郷のグラスハート星雲311より宇宙災害復興支援で派遣されている業者。この星は、チキュージンの存在で宇宙創世記の中でも散々たる悲劇から一向に復興出来ずに在る。

悲劇の連鎖が、使命感と自身のアイデンティティーに燃えて、目を輝かせながら降り立った5000年前の僕の前で、ずっとずっと飽きる事なくうんざりする程、続いている。今も変わらず。2000年、四苦八苦した。2000年、現状に耐えた。1000年前から、僕の心は完璧にやさぐれた。何を言ってもこの星はなんも変わらん。良い加減、疲れちゃったよ。

バーストした僕の前に、おかわりの「はちみつレモン」が置かれた。5000年前のこの星の、アルプスの切り立った山々に似ているロックアイスが、金色に輝く液体の光を吸収して光る。

「今日も荒れてるね。…たまにはアタシの話しでもしよっか？」

僕は思わず目を見開いて、カウンターの向こうで肩肘を着き、僕を微笑みながらただ見つめるママの言葉に耳を疑った。こんな事は初めてだった。

何故、どうして今日なのか、理由が解らなかった。呆気に取られる程に突然で、息づく間も無い唐突だったが、良く思い返せば僕がこの星に降り立ったあの日から、宇宙史を変える衝撃的な出来事はいつもこんな感じに、5年間全く素性を話さなかったママが全く理由無く突然に、自分の話しをし始めるのと同じ様に起こって来たのだ。ママはいつの間にか自分用のアレキサンド・ライトを作っていた。ナツメグを七味唐辛子のように大量に振り掛けた、ママ専用スペシャルで、僕には呑みこなせない酒だった。つか、僕は酒を呑んだら破壊生命体に変化するグラスハート星人であるから、飲んだら最期。この星の最期だ。

「アタシね。この銀河系担当の、赤色巨星の変異体なの。アタシの正体、太陽なんだ。夜だけこの店開いてるんだよ。内緒ね。」

大量のナツメグで表面が見えないアレキサンド・ライトに口を付け、ママは衝撃の事実をスナックの様に打ち明けた。冗談だと思う。きっと冗談だと、思う。僕はしばらく目の前でクソ不味いカクテルを美味しそうに飲み干すママを、言葉のビッグバンがぴたりと止んだ、あんぐり開かれた口のまま、呆然と見つめた。

ママの髪の毛が、風も無いのに揺らいでいた。

見間違いで無いと感覚で解り、僕はモナリザの様に微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3009z/>

ダガシスト

2011年12月10日18時57分発行